

31. 牛を飼う

牛はカラスキや馬鋤を引かせるエンジンであり、大切に飼われた。普通は2～3軒の仲間で飼っていた。黒い但馬牛が7割、朝鮮の赤牛が3割程飼われていた。

雌牛を使った

牛はメン（雌牛）を飼った。「オン（雄牛）は危ぶのおまんがな」（庄屋）。千里丘や三島など乾田地帯では子牛を買って3年ほど使いながら肥育し、金をもらって子牛と交換した。鳥飼中・下や一津屋など湿田地帯では成牛を買った。ドタでは子牛は使えない。

牛を仲間で飼う

牛は2～3軒で仲間を組んで1日交代や2日交代で飼った。まるまる1頭のうちは少なかった。夕方、炊いた麦を桶に入れて牛と一緒に次の家にもっていった（三島）。

暑い日中は休ませる

牛を使うのは夜明け～午前10時と夕方4時～日暮れ。暑い日中は休ませた（鳥飼上）。鳥飼や一津屋では午後は淀川の土手で牛を放牧した。河川敷に鉄の棒杭を打ち込んで20～30mの麻かシュロのハナシナワ（放し縄）を付けて草を食わせ、夕方連れて戻った。

ふだんは切り藁、5月には麦

A はオシギリ（押切り）。牛の餅はふだんは切りわらで、シブ取りをしてオシギリで切った。忙しい5月末からは麦を1升炊いて上から糠をふって食わせ、力を付けた。

C は『絵本通宝志』の江戸時代の牛小屋。

牛小屋でもウマヤ、牛を扱ってもバクロウ

D E は牛小屋でふつう別棟で門の脇などにあった。牛小屋はウマヤ（一津屋、千里丘東）、ウマゴヤ（鳥飼上）。牛なのにウマヤとは遠い昔に馬が飼われた名残り。

ウマヤコとは牛に踏ませたわらの堆肥。B のフォークで出した（千里丘東）。

たいていの村には副業でバクロ（馬喰）稼ぎをする人がいて牛の買換えの世話をした。三島郡全域を回って貝塚の市で牛の売買をし、獣医を兼ねる人もいた（三島）。

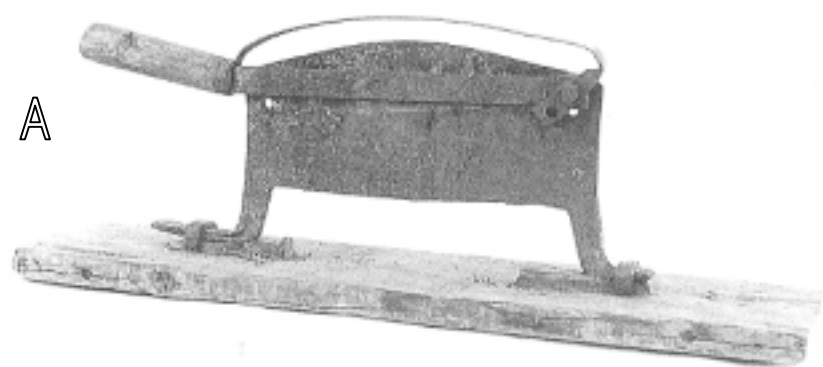
ドーズは中世語

米のとぎ汁をドーズといって牛に朝夕飲ませた（鳥飼八町）。水と糠、菜っ葉を入れて炊いたドーズを毎朝のませた（三島）。ドーズを飲ませた（千里丘東）。ドーズとは中世語ゾウズ（雑水＝米の研ぎ汁、鍋釜を洗った水）の名残り。ここにも文化財があった。

朝鮮牛

赤牛は3割（庄屋）。朝鮮牛はおとなしくて農耕に適していた（一津屋）。

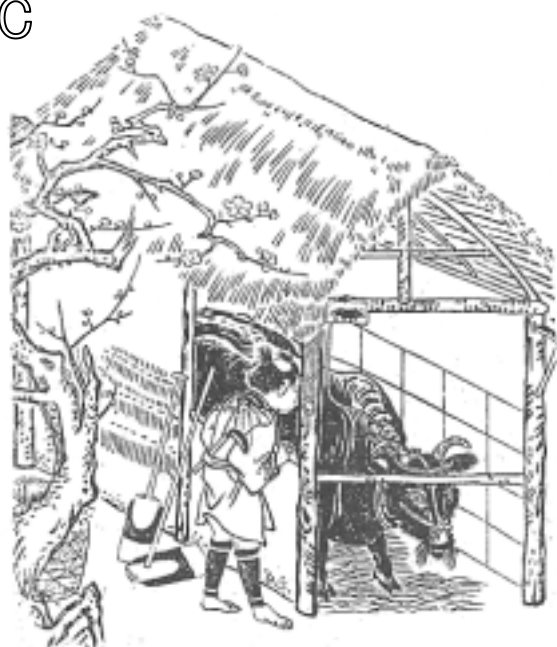
A



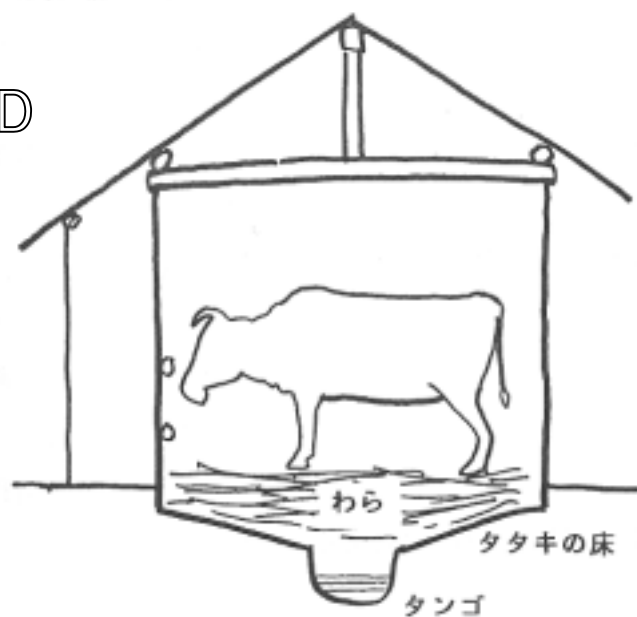
B



C



D



E

